

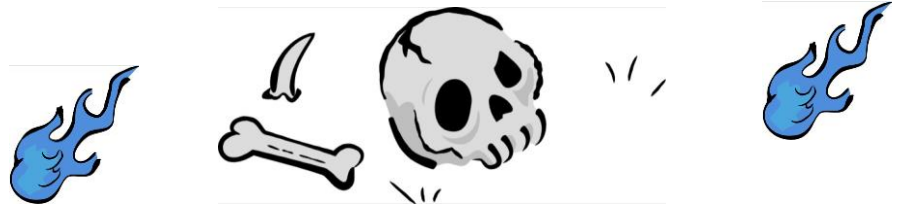
三善清行の怪異譚

— 『今昔物語集』 卷二十七「三善清行宰相家渡語第三十一」をめぐって—
文20-0527 濱崎椋太

<もくじ>

- ①要旨
- ②『今昔』27-31あらすじ
- ③三善清行(1)
- ④三善清行(2)
- ⑤化物屋敷周辺の地図
- ⑥五条天神・五条道祖神
- ⑦五条という空間
- ⑧まとめ

<要旨>



『今昔物語集』 卷二十七「三善清行宰相家渡語第三十一」は三善清行が化物屋敷と噂の場所へ移り住み、噂通り妖怪たちが出現するが、清行は全く動じず追い払ったという怪異譚である。清行の「まことの鬼神は、道理を知り、曲がったことをしないからこそ恐ろしい。」という発言を契機として、発言者の清行と、被発言者の妖怪やその化物屋敷周辺について深掘り、考察した。

○ 三善清行は非常に能力のある文人官吏であり、**超自然的存在にも理解と知識**があった。

○ 化物屋敷周辺の五条堀川あたりは、清水寺から続く危険な道筋にあたり、**五条天神と五条道祖神は妖怪のモチーフ**になっているのではないかと。





<あらすじ>

三善清行が化物が出ると噂の五条堀川あたりにある屋敷に「家渡（引っ越し）」する。

様々な化物が登場するが、清行は動じない。

小さい翁が出てきて「ここはずっと我々の屋敷だった」と主張するも、清行「正式な手続きを経ているのに何を言っているのか」と叱りつけ、化物たちは別の場所へ移動する。



清行の発言

「実ノ鬼神ト云フ者ハ道理ヲ知テ不曲ラネバコソ怖シケレ。」

ここでの鬼神とは…

- ×変化を起こす動物の類（例：狐、狸）
- 精霊や神



三善清行（みよしきよゆき）

こんなの書いた

『革命勘文』
『意見十二箇条』
『円珍和尚伝』
『藤原保則伝』
『詰眼文』
『善家秘記』

こんな人

八四七～九一八
家柄良くない
大学で勉学に励み立身出世
識緯思想をはじめ中国思想に詳しい
菅原道真左遷に加担
文章博士・従四位上
九人の息子（浄蔵・日蔵）



京都市下京区の下京雅小学校
にある「清行亭跡」の石碑⇒

←国立国会図書館デジタルコレ
クション, 『扶桑皇統記図会』
後編6, 好華堂野亭 著 [他], 三善
清行天象を見て菅公に書を奉る
図,
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/778661/1/7>

(2024年3月13日閲覧、元画
像を保存後、トリミングしてい
ます。)



説話にみる清行



菅原道真・紀長谷雄

漢詩の会で道真は長谷雄の詩だけを褒め、清行の詩は触れずに退出した。

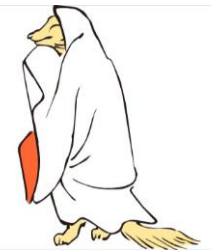
藤原時平臨終時

臨終間際の時平の耳から青い竜（道真の化身）が出てきて、清行に祈禱をやめさせるように指示し、清行はそれに応じ、時平は亡くなった。

伊吹山の僧侶と面会

伊吹山に靈験の強い僧侶がいた。その噂を聞いた清行は、わざわざ出向き、その僧侶と話し、僧侶が未熟者であると看破し、すぐに帰京した。

『善家秘記』（ぜんけひき）



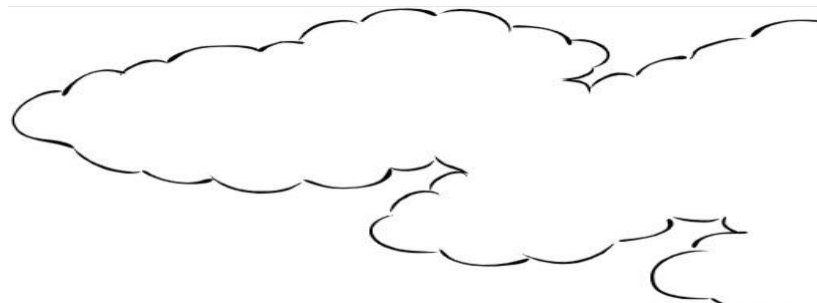
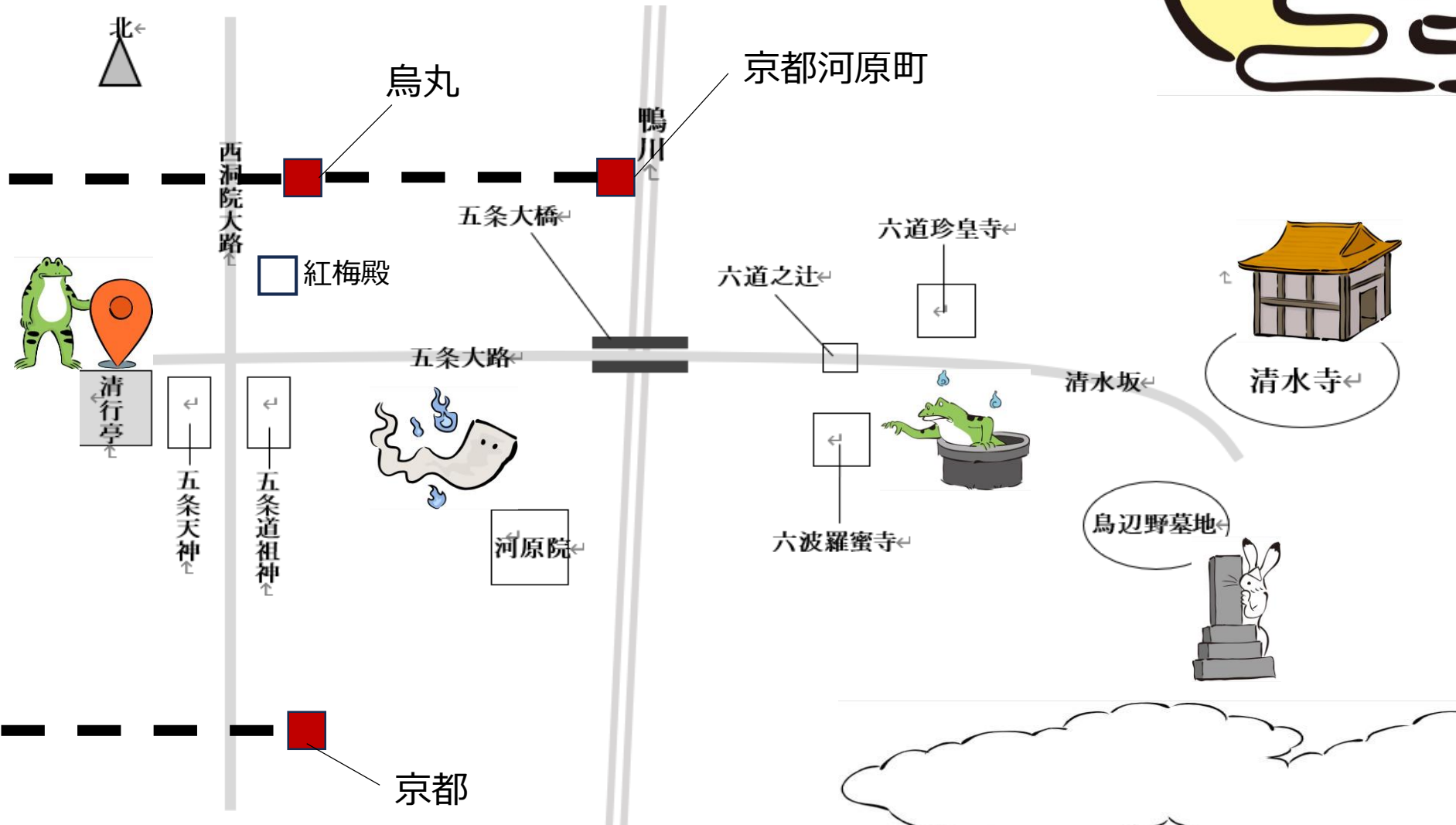
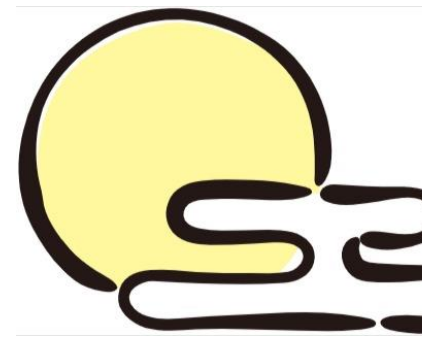
清行が晩年に記した説話集。完本は伝わらず七話のみ。
うち六つが超自然的な話で、あと一つは長寿の薬に関する話である。



清行が非常に超自然的な事柄に興味があったことがわかる。また、薬に関するような科学的なことも認めていた。科学・非科学両方を認めていた人物。

清行は非常に能力のある文人官吏であり、超自然的存在にも理解と知識があった。

<化物屋敷周辺の地図>



五条天神

七九四？創建

清行亭の東隣

少彦名命（すくなびこのみこと）を祀る

疫神としての性格を持つ

役割を果たせず罰をうけた

門に鞆（つぼやなぐい）をかけられる
島流しに処される



五条道祖神

五条天神より先に創建？

五条天神の東隣

猿田彦命（さるたひこのみこと）・

天鈿女命（あめのうずめのみこと）を祀る

境界に設置され悪疫防塞の役割を担う
道祖神は劣位の神



説話に登場する両社

神性的、地理的に混同がおこっている（『今昔』『宇治拾遺』）

疫神が道祖神を使役している話（『今昔』）

疫神と道祖神が婚姻関係になる話（『小男の草子』）

混同が起こるほどの両社の近似、両社の零落





五条という空間

道真が「こち吹かば」の歌を詠んだとされる紅梅殿⇒

五条あたりは紅梅殿があつたりと道真ゆかりの地でもあつた。清行は道真左遷に加担している人物。⇒“対道真”という連想が容易五条通りをずっと東に向かうと清水寺にたどり着く。

「清行亭」から清水寺までの道筋は五条道祖神・鴨川・五条大橋・清水坂と境界を象徴するものが乱立している。

また、六道の辻・六道珍皇寺・六波羅蜜寺・河原院・鳥辺野墓地と穢れ空間や、いわくつきの場所も多い。

⇒清水寺から、清行亭にいたるまでは境界や穢れ空間が乱立する危険な道筋であつた。

まとめ



○清行の怪異に対する叱咤は、清行が怪異に対する言論を用いた攻撃であり、「実ノ鬼神」発言は、本来の鬼神である怪異に零落の烙印を押した痛烈な批判であった。

○道真左遷・五条天神流刑から「家渡り」の連想ができることや、五条天神・五条道祖神と怪異は零落という共通点がある。
⇒怪異のモチーフは五条天神・五条道祖神ではないか。



『今昔』「二十七―三十一」は、零落した五条天神（道祖神）を怪異のモチーフとし、五条天神に鞆をかける作法よろしく、清行に怪異を叱咤させることによって、五条天神（道祖神）の再生を期待したというテーマがあり、さらに清行―道真左遷を連想させる「家渡」を物語の鍵にしている説話であった。